

対面塾 1 2 月例会 中嶋塾長による特別講座

第 1 部 音読指導編

中嶋塾@東京 2023 本田大輔 風見郁江

1) スピーキングテスト対策を伝授しましょう

「東京都が実施するスピーキングテスト対策に追われてしまい…やるべきことが終わりません。」

始まりはある塾生のこんな一言がメーリングリストで流れたことだった。

東京では ESAT-J というスピーキングテストが行われている。

東京都教育委員会は、小・中学校で身に付けた英語によるコミュニケーション能力を、高校でさらに向上させるため、小・中・高校で一貫した英語教育を進めています。令和 4 年度から都内公立中学校第 3 学年生徒を対象に、「中学校英語スピーキングテスト (ESAT-J)」を実施します。

(注) ESAT-J = English Speaking Achievement Test for Junior High School Students の略称

私も困っていました。スピーキングテスト対策って言われても…。このような私たちの悩みに対して、中嶋塾長は次のように返信をくださった。

「みなさんがご希望されれば、スピーキングやリスニング対策をどのようにやればよいかを、お教えします。いかがですか？」

「ぜひお願いします！」と塾生の懇願の声が集まった。藁をもつかむ思いである。塾長の救いの手が差し出され、対面塾 12 月例会にてこの講座が実現した。時間は 50 分。例会の前に集合した私たちを前に、塾長の特別講義が始まった。

2) 対策とは、教師が何をする事なのか

塾長「(スピーキングテストの)実施の方法には、課題はあるかもしれませんが、ここで問われている「話すこと」の力は、生徒が身につけておかなければならない力です。そのためには、私たち教師の正しい指導が必要です。」

(確かに一部の有識者が指摘するように、実施や採点の方法に課題はある。しかし、「話すこと」「聞くこと」の指導を計画的・系統的に行えないようでは、そもそもプロ教師として情けないぞ。)

ESAT-J の第 1 問目は「音読」である。指示は以下の通りだ。

Part A は、全部で 2 問あります。聞いている人に、意味や内容が伝わるように、英文を声に出して読んでください。はじめに準備時間が 30 秒あります。録音開始の音が鳴ってから解答を始めてください。解答時間は 30 秒です。

塾長「採点者はまず、**よどみなく音読できているかどうか**をチェックしています。音読させてみれば、その生徒が内容を理解しているかどうかはすぐに分かりますよね。」

(たしかに、内容や意味をつかんでいない生徒の音読だと、どうしてここで区切ったのかを尋ねたくなるようなものが多いよな。)

私は、自分が担当してきた生徒の顔を思い浮かべながら振り返っていた。

塾長「さて、『準備時間が 30 秒あります。』という説明があります。この 30 秒の間に、みなさんは生徒たちに何をさせていますか？」

そう投げかけられて、塾生は言葉に詰まった。

この「30 秒」を意識したことがなかったからだ。私たちは音読指導の「前」に行うべき指導について考えなければならなかった。音読の前には「黙読」ができなくてはならない。

塾長はゆっくり間を取ってから、この 30 秒の音読準備のために付けておかなければならない力を整理して下さった。

- ・英文を高速で読むために、目が速く動く力
- ・意味のカタマリを判断する力
- ・内容語と機能語を区別して感情を込めて読む力

塾長「こういった力を、日頃から生徒たちに身につけさせる指導が必要なのです。」
「みなさんのクラスの子どもたちは、内容語と機能語の違いを説明できますか？」

会場を見渡すと、手を挙げる塾生は一人だった。

塾長「教師が知っているだけではダメなのです。子どもたちも知っていて、さらにできるようになっていることが大切です。」

その日、塾長が何度も私たちへ繰り返された言葉がある。

その力をつけるには、どんな訓練が必要ですか？

ある設問や学習課題をクリアするには、こんな力をつけなければならない。

では、そのためにどんな訓練をしておく必要があるか。それを習慣にするにはどうしたらよいか。それを家庭学習の中で自分一人でも行えるようにするには、どうしたらよいか。

常に、そのような逆算した「問い」を、我々塾生に投げかけてくださった。

3) テストは「目的」ではなく「手段」

話は再び ESAT-J の問題へと戻り、塾長は問題文の場面設定について言及された。

あなたは留学中です。今、あなたは学校のクラスで、あなたが初めて留学先に到着したときのことについて話すことになりました。次の英文を声に出して読んでください。

塾長「留学中という『状況』をイメージさせ、留学生になりきって音読させる必要があります。」

どの単語をどのように読めばよいか。単に字面通り読めればいいのではなく、その目的場面状況に合わせて「演読」できる生徒を育てるのだ。

(そうか、テストを「目的」とするのではなく、あくまで、英語力を身につけさせるための「手段」として考え、自信をもって正しい指導すればいいのだ。テストでの高得点はその副産物なのだから。)

実際に読んだ英文は以下の通りだ。

※ ESAT-J の HP 等をご覧ください、実際に使用される英文 (もう少し長い) を参照されたい。
次は例題である。

▶ 例題

On my first day here, I was sad because I couldn't see my family. But everyone was kind to me, so I felt better.

塾長「この英文に気持ちをしっかり込めて音読できるようにするためには、日頃からどんな指導をすればよいですか？」

(塾生の考える間—)

塾生の様子を少し待たれてから、塾長はおっしゃった。

中嶋「生徒たちに日頃から、その言葉を発している人物の心情を考えさせていないと急にはできませんよね。例えばナレーターになったつもりで、ニュースキャスターになったつもりでといった形で、『なりきり音読』をさせるんです。そういう訓練を日頃からしていれば、生徒は英文を読んだときに、自然にパッとイメージがわくようになりますよ。」

全国学力調査によると、さいたま市の英語力は群を抜いて高い。それはなぜか。その要因の一つとして、小学校 6 年生で全員が英語劇をやっているからであると塾長は教えてくださった。英語劇は「会話文」。登場人物の心情を理解して発話しなければならない。また、どこに話者が立っていて、まわりには何があり、どういう間をとって話さなければならないか、という「場面」を自然と考えるようになるという。読解力と表現力は見事に繋がっているということである。

塾長「授業の中で、『〇〇になりきって書いてごらん』とか『読んでごらん』という指示が、とても重要だということです。」

(「なりきり作文」だけでなく、「なりきり音読」という活動も有効なんだな。3 年間で育てたい生徒像を明確にしていけば、体系的にそして系統的に生徒を育てていくことができる…。考ただけでも鳥肌が立つ。)

ワクワクしながらノートにそうメモをとると、塾長は次のように質問された。

塾長「では、準備時間 30 秒の間に、どの程度のスピードで英文を読めるようになっておけばいいのでしょうか？ 実際にみなさんで黙読してみてください。」

塾長からそう促され、私たちは英文を目で追った。塾長は、私たちの「目の動き」を会場の前方からじっくりと観察されているようだった。

中嶋「そのように、クラスの子どもたちもサーっと目で追える生徒にしなければなりませんね。」

そしてひと言、こうおっしゃった。

中嶋「では、それができるようになるには、どんな訓練が必要ですか？」

全国の都道府県のリスニングの問題は、基本的に 1 分間に 150 語の速さで読まれる。ということとは、子どもたちも 1 分間に 150 語の速さで音読できないと、聞き取ることはできない。そういう訓練を日常的に積み重ねてこそ、聞き取る力は鍛えられていく。

では、どうするか。

授業では、まず生徒に教科書の 1 ページの中に何語書かれているかを数えさせることだ。その語数を何秒で読めればよいのか「1 分間で 150 語（入試基準）」という数字を、あらかじめ伝えておく。例えば、このページは 15 秒、このページは 22 秒、というように。そのように判断できる「基準」があれば、子どもたちは納得して音読のトレーニングをするようになる。

音読と同時に必要になるのが、アイシャドーイングだ。アイシャドーイングとは、コンテンツシャドーイング（内容を追いかける）やプロソディシャドーイング（音声を追いかける）とは異なり、音声が流れると同時に目で文字を追いかけるトレーニングである。それをすることで、高速で目が動き英文を追いかけるトレーニングすることができる。

アイシャドーイングのあとは、ペンを持つての音読だ。ペンは、自分が音読する単語の 2 語先を指すようにするのだという。

（目の動きを鍛える具体的な指導法がこんな身近な道具でできるなんて…アイデア次第でなんでもできるんだな…）

初読のテキストで練習不足ということもあり、途中でつかえてしまう塾生もいた。

塾長「もし途中でかんだり、つまずいてしまったら？ そう、最初からやり直してくださいね（ニッコリ）」

「ひえ～～～！！！！」

悲鳴をあげる塾生たち。だが、みな納得していた。

（そうか、このようにすれば生徒たちはおのずと、何度も繰り返し練習することになる。つまずかずに読めた瞬間、達成感・伸長感・満足感が全て得られる。）

塾長「ある単元が終わったら、単元を一気読みする。一度もつまずかずに音読できたら合格とする、という仕組みにしておく、このあと生徒はどうしますか？」

このような仕組みを意図的に設定すれば、生徒たちは自分から家庭学習を始めるだろうということとは想像ができた。そうなれば、生徒が音読テストで困ることはなくなるだろう。まして今の時代は、一人一台のタブレット端末も配られている。練習した結果や、一番上手に音読できた映像を送るよう課題を出すこともできる。

このように生徒に見通しを持たせ、自分から取り組ませるような仕掛けをつくることで、彼らのメタ認知能力はぐんと高まるのだ。

4) 4コマ漫画対策も授業中にできます

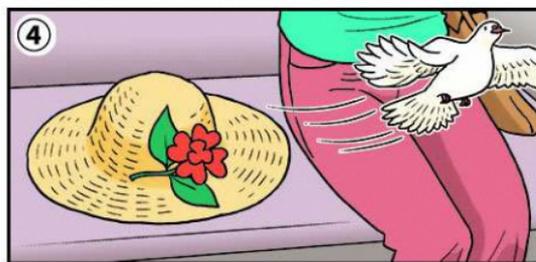
次にスクリーンに映されたのは、Part C のテストだった。4コマのイラストに描かれている事柄を描写するテストだ。私は頭の中で、次のように自分に問うていた。

(絵を見て描写できる力をつけるには、日頃からどんな訓練をしておかなければならないのか?)

Part C は、4コマイラストの問題です。これから画面に表示される1コマめから4コマめのすべてのイラストについて、ストーリーを英語で話してください。はじめに準備時間が30秒あります。録音開始の音が鳴ってから解答を始めてください。解答時間は40秒です。このPartには例題はありません。

あなたは、昨日あなたに起こった出来事を留学生の友だちに話すことになりました。イラストに登場する人物になったつもりで、相手に伝わるように英語で話してください。

(準備時間30秒/解答時間40秒)



私たちの顔を見ながらほほえみ、塾長は次のようにおっしゃった。

塾長「まずは、教科書に出てくる絵や写真を、日頃から描写する訓練をする必要があります。それがリテリングにつながります。もちろん教科書本文の暗記ではだめですよ。あくまでも自分の言葉で説明できるようにしましょう。」

例えば、上の1枚目の絵(①)で、電車が来ていること、女の子が電車に乗る様子、女の子の持ちものなどが説明できる力が必要である。同様に2枚目では、3枚目では、4枚目では…と「ストーリーテリング」できるように、生徒の描写する力を日頃から鍛えていかなければならない。

(教科書を使ってそれに取り組むには、どうしたらよいのだろう?)

塾生の心の声が聞こえたのか、塾長は次のように続けられた。

塾長「教科書には、描写に向き・不向きのページがあるんですよ。」

ページをめくり読み比べる塾生達。

そうだ、「会話文」はやりにくくても、「地の文」は適している。

先ほどはペンを持って音読をしたが、それは「高速で読める」ようになるためである。今度は教科書を片手にもって「演読」ができるようにならなければならない。

実際にやってみることにした。教科書を両手でもつと「正しく読もう」という意識になってしまい、効果が薄れるという。教科書を持っていないもう片方の手を自由に動かしながら、演読していく。そうすると自然と感情が入っていく、と塾長から教えていただいた。

私たちは、教科書片手にウロウロ歩きながら、ジェスチャーたつぷりに演読を試みた。すかさず、塾長からの言葉が飛ぶ。

塾長「目の前に聴き手がいるんですよ！動いて、動いて！」

その声に呼応するかのように、教科書から目を離し、身振り手振りを駆使しながら表情豊かに「演読」に挑戦する塾生の姿がそこにあった。

5) 音読を家庭でできる自律的学習者を育てるには

塾長は以前、次のようにおっしゃっていた。

塾長「私も田尻さんも北原さんも、他の人より何倍も音読にかかる時間が長いです。内容理解を早く終えて、どれだけ音読の時間を確保できるかが鍵になります。」

(自分の授業は、内容理解に時間がどうしてもかかってしまって…音読に時間を割けない…)

私の心の声はこの15分後に、あっという間に解決されることになる。

塾長は私たちに、音読指導「以前」の話をしてくださった。

塾長「子どもたちが家庭で音読できるようになるためには、教えるべきことをきちんと教えてあげなければなりません。」

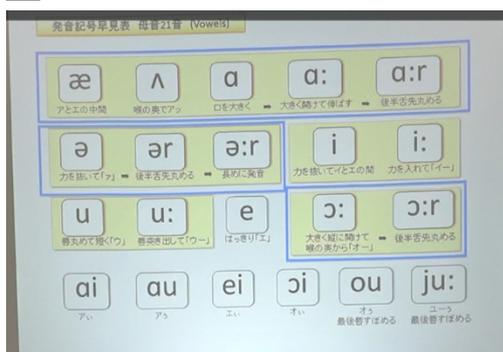
自律的学習者は、「教師が教え、子どもは学ぶ」という環境の中で育つ。教えるべきことは徹底して教え、できているかどうかを必ず確かめることが必要である。

音読においても「CD を真似て読んでごらん」「とにかく読んでごらん」という指導はご法度である。3年間の中で体系的・系統的に指導を積み重ねなければならない。

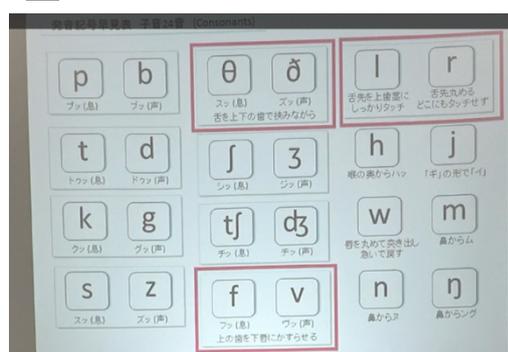
塾長「発音指導は、絶対にやらなければなりません！」

塾長は力強くそう言い切られた後、まず母音と子音について整理して下さった。

1 母音の発音指導

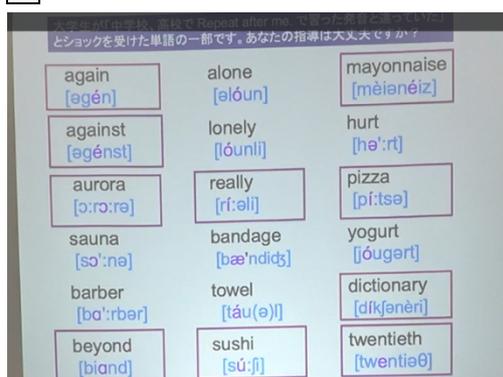


2 子音の発音指導

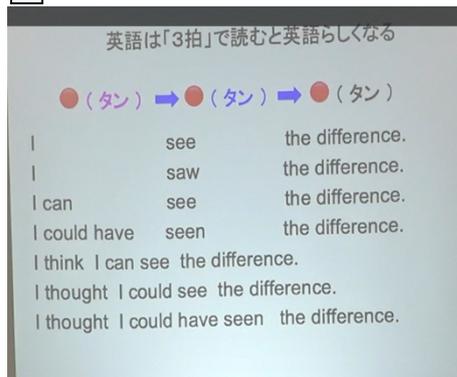


どちらも、あれもこれもと教えすぎず、特化して教えることが重要である。間違えやすい単語についても注意喚起が必要だ。again / alone / mayonnaise などよく使う単語ほど要注意である。教師自身が発音記号を確認して正しい発音を教えたい。さらに「3拍」リズムは超重要だ。英語は「リズムの等時性」を特徴にもつ言語である。そのリズムを教えることが、内容語と機能語を区別して音読できることにもつながっていく。

3 発音記号をもとに正しい発音を教える



4 「3拍」リズムを教える



5 内容語と機能語を教え、音読の際に区別する

6 強弱を教える

英語は「強 アクセント」(ストレス)
日本語は「高低 アクセント」(ピッチ)

内容語— その単語のみで具体的な意味を持っている単語
名詞、一般動詞、副詞、形容詞、指示代名詞(this, that)、
疑問詞(what, who, when, why, how)、not (否定)

機能語— 文を成立させる、文法的な機能を果たす語で
それ自体は独立した意味がない語。
冠詞、前置詞、人称代名詞(he, she)、be動詞(is, am, are)、
助動詞(do, does, can, must, will など)

英語の音読がうまくなるコツ
内容語は強く、長く発音。機能語は短く、弱く発音

強く読む単語と弱く読む単語がわかると...

●(タン) → ●(タン) → ●(タン)

think	see	difference.
●	●	●
thought	see	difference.
●	●	●
thought	have seen	difference.
●	●	●

内容語をイメージし、感情込めて音読できることが「演読」のパフォーマンスを際立たせることは間違いない。さらに、その理解がより確かな「強弱」を生み出し、英語の音声上の最大の特徴である「リズムの等時性」のマスターにつながるのだ。

塾長「こんな風に強弱を目で理解してもらおう方法もあります。」

スクリーンには文字の大小と濃淡で音声を「見える化」したスライドが映された。

7 文字の大小、濃淡で示す。

Small talk
ジェスチャーを使って指さしながら言ってみましょう。

This is Japan.
We live in Japan.
We are from Japan.
Tom sensei is from Canada.
Where is Canada?
Yes. It's here.



There are many countries around the world.
For example, Australia, India, Kenya,
Egypt, Brazil and so on.

Which country do you want to go to?



濃い部分は「内容語」= 強く長く読む。薄い灰色の部分は「機能語」= 弱く短く読む。非常に分かりやすいコントラストになっている。教科書はこのようにはなっていない。このようなスライドを作って示してやれば、子どもたちは意識して意味と読み方の工夫を一致させて音読できるようになる。

8 音の連結を教える。

音の連結のパターンを見る

★ポイント「単語の最後の子音+単語の最初の母音(またはj) youの半母音」

① look at ② rock and ③ call out ④ walk around
 ⑤ and I ⑥ thank you ⑦ don't you ⑧ about you
 ⑨ an amazing ⑩ such a ⑪ has a ⑫ once a
 ⑬ in a ⑭ each other ⑮ seen in ⑯ been in
 ⑰ because of ⑱ a lot of ⑲ lots of ⑳ take off

9 音の脱落を教える。

音の脱落(消失)のパターンを見る

★ポイント「単語の最後の子音+単語の最初の子音」が性質が似ている場合(同じ口形)、前の子音の方が脱落。脱落(消失)する子音は喉の奥に飲み込むようにする。

① want to, ② use d to, ③ take care,
 ④ blak coffee, ⑤ big game, ⑥ good day,
 ⑦ good bye, ⑧ sid down, ⑨ wend down,
 ⑩ old days, ⑪ is that, ⑫ job becomes,
 ⑬ this style, ⑭ stop playing, ⑮ about two

さらに、このような音声変化も子どもたちに教えなければいけない。

リンク(音が連結する)やリダクション(音が脱落する)といった音の化学変化も、1年生から体系的・系統的に教えていく。その知識の蓄積があるからこそ「どこどこがつながるかな」というコーチング(引き出す指導)が意味をもつのだ。教えたら引き出す。これは生徒の気づきを促す原理原則である。このような基礎知識を徹底して教え、できるようにしない限り、生徒は家に帰ってもどのように音読すればいいかわからないまま自己流の音読をすることになってしまう。

10 Teacher's Book をコピーして渡す。

コピーして渡すか、書き込まないと、家で正しい練習ができない。

- ストレス記号の位置
- 「連結」の箇所
- 「消失」の箇所
- チャンキング(ポーズの場所)
・文中の|までをかたまりとして一気に入る
- 抑揚や「間」を考える
・声優、ナレーター、ニュース・キャスターになったつもりで読む
- 内容語(名詞、形容詞、副詞、一般動詞、疑問詞、指示代名詞、そして not)

Ms. Miller: Do you know the song "Happy Birthday"?
 Ken: No. Was it written by Stevie Wonder?
 Ms. Miller: Yes, it was. It was used to set up a national holiday for Dr. Martin Luther King, Jr.
 Ken: I know his name. He fought for civil rights.
 Ms. Miller: That's right. Stevie was greatly influenced by Dr. King.
 Ken: I see. Is the holiday celebrated by all people in the U.S.?
 Ms. Miller: Of course. Dr. King showed us a way of mutual respect.

このように Teacher's Book のコピーを生徒に渡し、音声の特徴を記号で書き込ませる。2週間後の音読テストは、別室ではなく教室のみんなの前で一人ずつ行う。

Teacher's Book の通りにできていれば指1本、違っていたら指2本とみんなで評価する、と伝えておく。

塾長「そうしたら子どもたちは、どんな準備をしますか？」

塾長「そう、家で練習をしますね。さらに生徒は『音源』を必要とします。デジタル教科書の学習者がタブレットに入っていればそれが一番良いです。なかったとしても、インターネット上には『Natural Reader』という便利な無料サイトがあります。英米豪加のアクセントや声色（声質）に種類を設けて、極めて正確に音読してくれます。」

時代は大きく変わっている。音読指導はもう待ったなしである。

第2部 リスニング指導編

1) できないことの自覚から全ては始まる

塾長の講座も、残り時間は20分。

手元の腕時計をちらと確認をされ、次のようにおっしゃった。

塾長「それでは皆さんお待ちかね、リスニング指導に移りましょう。」

スクリーンに真っ白なスライドを写し、とあるリスニング教材を流された。

塾長「最初は、① コンテンツシャドーイングです。内容を追いかけてください。」

音源から流れてくる英語のスピードは速く、ついていくことがやっとだった。

塾長「では次に、目で文字を追いかける② アイシャドーイングをしてみましょう。」

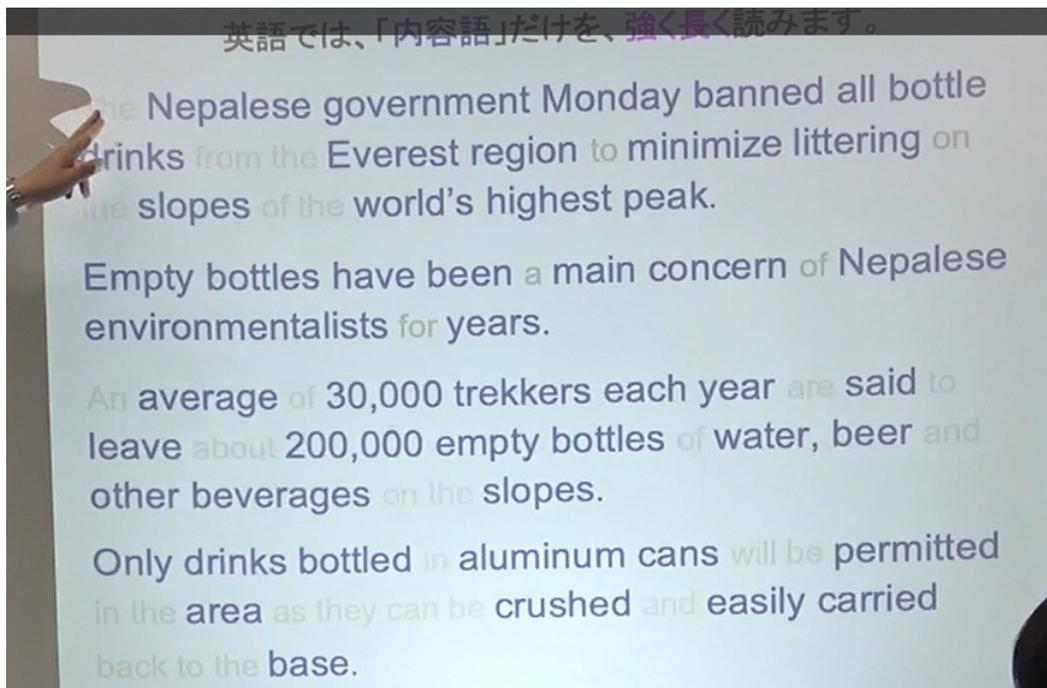
スクリーンにテキストが映し出される。

(あっ、あそこはそう言っていたのか…文字を見てハッと気づくな。)

塾長「最後は、口パクしながら③ lip-sync シャドーイングです。」

(音源のスピードが速くて、全然ついていけないところがあるな…)

不安げな表情を浮かべた塾生たちに、塾長は「聞こえない原因」の種明かしをしてくださった。



塾長「なぜ、みなさんは速い、ついていけないと感じてしまうのでしょうか。それは、英語は『機能語』（スライドの灰色の部分）が弱く短く読まれるからなんです。逆に言えば、『機能語』の特徴を理解して音読できるようになれば、聞き取れるようになるということなんですよ。」

それから塾生は、「内容語」と「機能語」の強弱やスピードに気を付けて再度音読をした。塾生の音読が終わったことを確認して塾長は次のようにおっしゃった。

塾長「では、今から20分間練習します。でも、ゴールはこれですよ。」

そうおっしゃって、スクリーンを見ると、今日のめあてが書かれてあった。

2) ゴールまで導く自信と矜持

先ほどの音源の速さで音読できること。それが今日のゴールです。
文字が消える前に、全部読み終わってください。こんな感じです。

塾長「では、読んでください。」

スクリーンに一行ずつ英文が出てくる。塾生たちは必死に音読する。
だが、時間が経つと次の写真のように一行目が消えてしまう！
すぐに消えていく文字列に、会場はどよめいた。

塾長「消える前に、読み終わってください！」

先ほどの速さで音読するのが、みなさんの今日のゴールです。
文字が消える前に、全部読み終わってください。こんな感じです。

drinks from the Everest region to minimize littering
on the slopes of the world's highest peak.

2行目も消え…最後には…

先ほどの速さで音読するのが、みなさんの今日のゴールです。
文字が消える前に、全部読み終わってください。こんな感じです。

on the slopes of the world's highest peak.

全ての英文が消されてしまう…。高速で読まなければついていけない。

必死になって最後まで消えていく文字を追いつけ、やがて撃沈していった塾生たちに、塾長は自信たっぷりにこう言い切られた。

塾長「はい、今から練習したら、これが全員読めるようになります！（ニッコリ）」

（こうやって堂々と自信たっぷりに言い切ってくれるから、生徒たちは塾長を信じてついていったんだろうな。）

3) 内容理解はあっという間に

塾長「では、行きますよー！」

塾長はサッと内容理解へと段階を進められた。

（中嶋塾長は本当に無駄な言葉をおっしゃらない。だから、学習者は余計な思考をはさむことなく活動に集中できるんだ。）

チャンクごとに理解していきましょう。高速音読の練習です。
 build up reading で、誰でも読めるようになります。
 The Nepalese government Monday banned all bottle drinks /
 from the Everest region /
 to minimize littering /
 on the slopes of the world's highest peak.
 Empty bottles have been a main concern /
 of Nepalese environmentalists /
 for years.

塾長「“The Nepalese government Monday banned all bottle drinks.”これを頭から理解していきましょう。意味はなんですか？」

塾生「ネパール政府は 月曜日に 禁止しました 全てのボトル飲料を。」

前頁に示したように塾長によって示された英語のチャンクごとに、私たちは前から意味を読み上げていく。その後も、チャンクを塾長が英語で読み上げられ、私たちが日本語に訳すという活動を展開された。塾長は英語のみを音読され、スクリーンの日本語は言われない。一目瞭然だからだ。

塾長「英語は、このようにチャンクに分け、頭からそのまま理解させていくのです。」

英文の内容理解をさらに続く。

塾長「はい、3万の？」	塾生「登山者たちが」
塾長「そう登山者が？」	塾生「言われている」
塾長「言われているわけですね。なんて言われているの？」	塾生「置いていく」

塾長「“to leave”だから？ うん、20万本の？ “empty bottles”を？」

「そう、置いていく。それで、何の？」

「“of water, beer and other beverages”だから？」

塾生「水とかビールとか他の飲み物の…」

塾長「はい、どこに？」

塾生「坂道に」

塾長「“Only drinks bottled in aluminum cans…”どんな？」

塾生「アルミ缶の…」

塾長「アルミ缶に？ 入った飲み物だけが？ “will be permitted” そう、許されていますよね。どこで？」

塾生「エベレストで」

塾長「エベレストで。そう。」

「なんで？ “as they can be crushed and easily carried back”

「はい、そうだね。潰したり、簡単に持って帰れるんだね。

“to the base”どこまで？」

「そう、麓まで。」———

ポンポンポンーン！とキャッチボールのように、文の頭からチャンクに分けて、読み取り（内容理解）を行ってくださった。無駄な時間が一切ない。

さて、塾長がこのときの内容理解に要した時間を、皆さんは何分くらいだと予想されるだろうか。10分？ それとも5分だろうか？

正解はなんと「**2分**」である。

「早く内容理解を終えて、音読にたっぷり時間を注がないと！」。まさにその言葉の通り、これほどの分量(83語)と難易度の英文の内容理解を、わずか2分で終え、音読できる時間をたっぷりと残されたのだった。

4) Backward Build up Reading

スクリーンにはチャンクごとにスラッシュが引かれたスライドが提示された。

- ① The Nepalese government Monday / banned all bottle drinks / from the Everest region / to minimize littering / on the slopes of the world's highest peak.
- ② Empty bottles have been a main concern / of Nepalese environmentalists / for years.
- ③ An average of 30, 000 trekkers each year / are said to leave / about 200, 000 empty bottles of water, beer and other beverages / on the slopes.
- ④ Only drinks bottled in aluminum cans / will be permitted in the area / as they can be crushed and easily carried back / to the base.

内容理解の後、すぐさま塾長は音読指導に入られた。この後の音読指導も、活動の切り替わりはわずか0.1秒程である。学習者に全く隙を与えないテンポで活動が展開されていく。指導の見通しが完璧に頭の中に入っておられるのだ。

塾長「では、今から、英文を後ろから順に読んでいきます。」

そうおっしゃると、前項の英文の④の部分の音読から指導に入られた。

この一連のご指導をすべて文字に起こし、以下に示したい。

塾長	「to the base」	塾生	「to the base」
塾長	「back to the base」	塾生	「back to the base」
塾長	「easily carried back to the base」	塾生	「easily carried back to the base」
塾長	「can be crushed」	塾生	「can be crushed」
塾長	「can be crushed and easily carried back to the base」		
塾生	「can be crushed and easily carried back to the base」		
塾長	「as they can be crushed and easily carried back to the base」		
塾生	「as they can be crushed and easily carried back to the base」		
塾長	「the area」	塾生	「the area」
塾長	「in the area」	塾生	「in the area」
塾長	「permitted」	塾生	「permitted」

塾長	「will be permitted」	塾生	「will be permitted」
塾長	「will be permitted in the area」		
塾生	「will be permitted in the area」		
塾長	「will be permitted in the area as they can be crushed and easily carried back to the base」		
塾生	「will be permitted in the area as they can be crushed and easily carried back to the base」		
塾長	「aluminum cans」	塾生	「aluminum cans」
塾長	「in aluminum cans」	塾生	「in aluminum cans」
塾長	「bottled」	塾生	「bottled」
塾長	「only drinks」	塾生	「only drinks」
塾長	「only drinks bottled in aluminum cans」		
塾生	「only drinks bottled in aluminum cans」		
塾長	「Only drinks bottled in aluminum cans will be permitted in the area as they can be crushed and easily carried back to the base.」		
塾生	「Only drinks bottled in aluminum cans will be permitted in the area as they can be crushed and easily carried back to the base.」		

最後の英文を、夢中になって音読している私たちを、じっと観察されていた塾長。

長い文を勢いよく読み切り、満足そうな顔の塾生にむかって次のように投げかけられた。

塾長「なぜ、読めるようになったんですか？」

思考を巡らす私たちを前に、塾長は意外なことを教えてくださいました。

塾長「一番後ろから付け足しているからです。これはプラスバンドの練習方法と同じです。プラスバンド部では演奏でつまずいたら、つまずいたところだけを練習し直すわけではありません。つまずいたところの後ろの部分からやって、段々と前に付け足して練習していくんです。」

このようにして④→③→②→①と塾長と私たちは Backward Build up Reading を完成させた。驚くべきことに、所要時間はなんと 4 分 10 秒だった。

あっという間に進んでいく活動に関わらず、私たちには満足感があつた。なぜなら自分たちが「できるようになっている」実感があつたからだ。

塾長「次は、①→②→③→④と文章の前から最後まで、つまずかずに全部読めたら合格です。

もし噛んだら？ そう、最初からです。（ニッコリ）」

この後、私たちが必死の形相で音読をしたのは、言うまでもない。

このように「目指すゴール」が明確（最初に提示されている）であれば、見通しをもって練習に取り組むことができるのだ。

5) ペア学習はどのタイミングで始める？

塾長「次はペアでジャンケンをしましょう。勝った人は頭から最初のチャンクまで、負けた人は 0.1 秒で交代して続きのチャンクから音読する。もちろん噛んだら？ 最初に戻る。下に行くまでに、40 秒で読んでください。（ニッコリ）」

私たちは隣の人とペアを組み、音読を始めた。

（そうか。このタイミングでペア学習なんだ。個人で「できるようになって」からペア学習を始めない限り、この学習が機能することはないのだから。）

活動が終わると間髪入れずに次の活動のスライドと指示が出る。

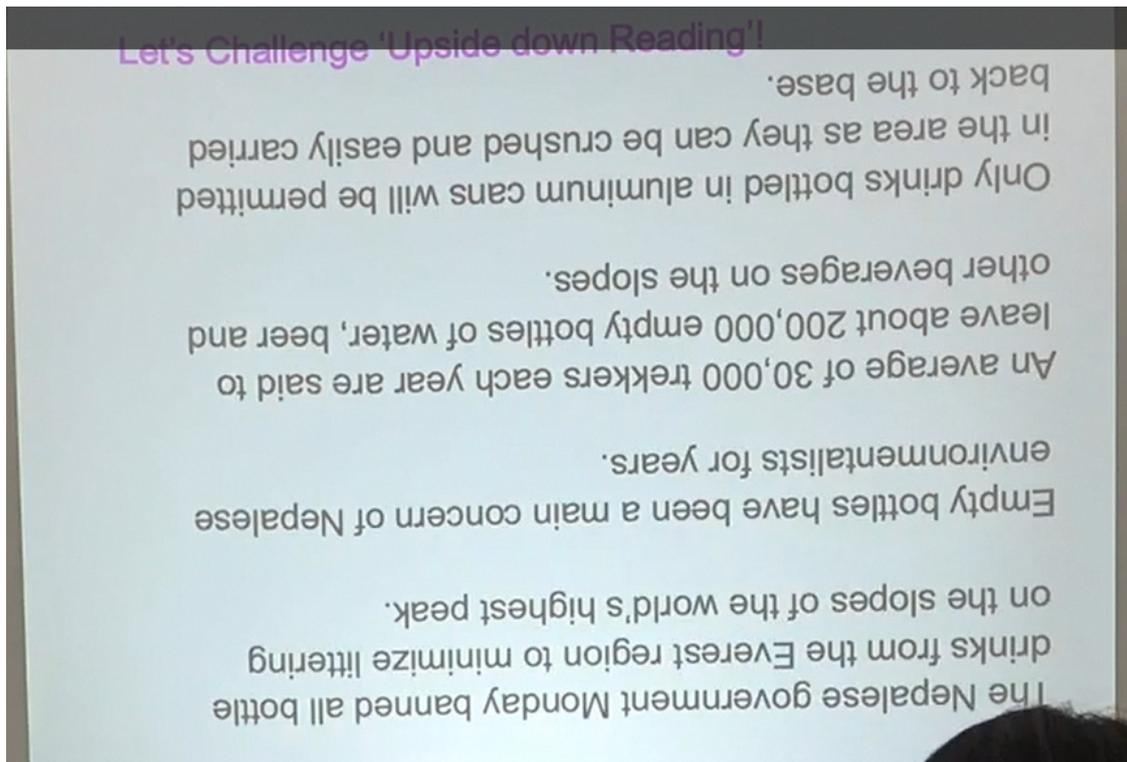
塾長「次は『逆さま読み』にチャレンジしてみましょう。いいですか？ 出てくる順に、読んでくださいね。」

スクリーンには、なんと、下部から文字が逆さになっていた。下から順に英文が出てくという奇想天外な指導だった。

（読みにくいんだけど…なぜだろう。意味を理解しているからか、意外と読めるぞ。）

その後、塾長が①から範読、その後が続いて私たちも音読をした。①の音読が終わったら、②→③→④と全てを音読し終えた。そして塾長はすぐさま次の指示を出した。

塾長「噛まずに下から上まで読めたら合格。はい！ よ～い、ドン！」



塾長「はい、そうしたら、元に戻します。元に戻すとだいたい1.3倍から1.5倍の速さで読める
ようになります。」

一文ずつ浮かび上がるスライドを高速で追いかけて、音読する塾生。

(本当だ・・・！自分でもびっくりするくらい速く読める・・・！！これが生徒だったら目の前の先生を「マジシャン」だと思うだろうな。)

塾長は私たちの活動の様子をじっと見つめられた後に、珠玉の一言をくださった。

塾長「ほら今、目が速く動いているのがわかるでしょ？その力をみなさんが生徒につけさせなきゃいけないんですよ。」

6) 英語で授業をする方法、教えます

スライドは続く。塾長は見事にこの短時間で、おおよその内容を私たち塾生に暗記させた。そしてそんな私たちを決して飽きさせることなく、さらなる「できる」を積み重ねる活動へと導いていかれる。

塾長「The Nepalese government Monday banned... what?」

塾生「all bottle drinks」

塾長「Yes. From where?」

塾生「from the Everest region」

塾長「Right.」 「For what?」

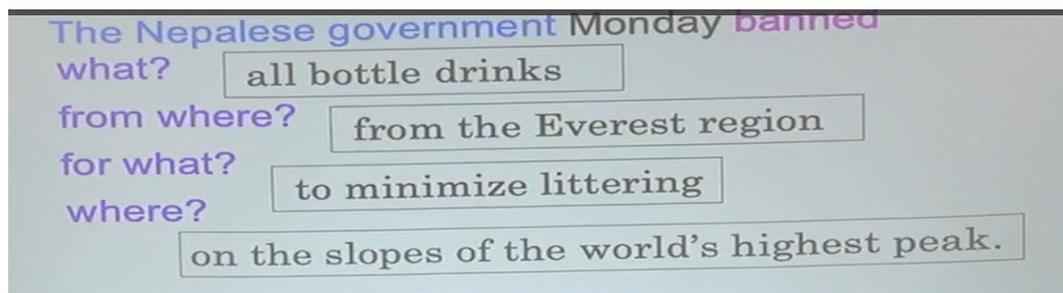
塾生「to minimize..」

塾長「to minimize?」

塾生「littering」

塾長「where?」

塾生「on the slopes of the world's
highest peak」



塾長「OK. Empty bottles have been what?」

塾生「a main concern」

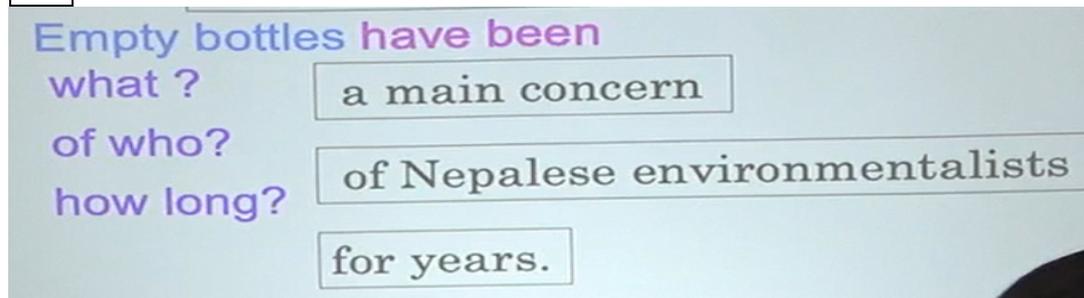
塾長「Yes, right. A main concern. of who?」

塾生「Of Nepalese environmentalists」

塾長「OK. How long?」

塾生「For years」

塾長「Yes. Great.」



塾長「これが英語で授業を進める方法です。このように正しい指導をすれば内容をしっかり理解
させていくことができます。」

(すごい…**英語の語順のまま**内容理解が完了しちゃった…)

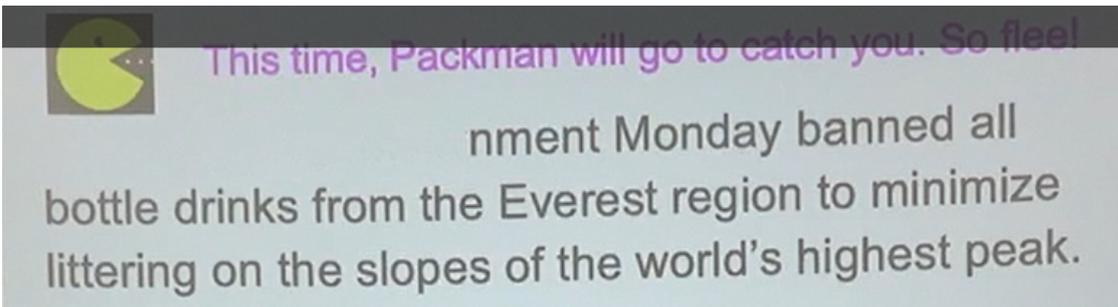
塾長のリスニング指導は、音にフォーカスしたり、意味にフォーカスしたりしながら、ぐるぐるとスパイラルに高まっていく。階段というよりもまるで「螺旋階段」を登るように上達を体感することができた。

7) パックマン現る

塾長「はい次は、パックマンが追いかけてきます。」

塾長のご指導は、終わっていません。このテンポの良さはとても心地がいい。

スクリーン上では、音読を始めると文字が次から次へとパックマンに食べられていく（笑）



塾長「さあ、みなさん、逃げる、逃げる！！」

塾長が場を演出なさる。塾生一同、必死に音読をしてパックマンから逃げていく。

息つく暇もなく、私たちは次の階段へ駆け上がる。

塾長「チャイムが鳴ります。このチャイムが鳴り終わるまでに、読み終わって座ってください。

はい、立ってください。」

「キーンコーン・カーンコーン…」

会場には学校でよく聞くあのチャイムの音が…。競ったように読み始める塾生たち。最後までひと息で読まない間に合わないほどの時間だ。

（これが1分150語で読むように仕向ける方法なのか…。教師から「このページは何秒で読めなきゃだめだよ」と示されるより、何十倍も楽しい！！！！）

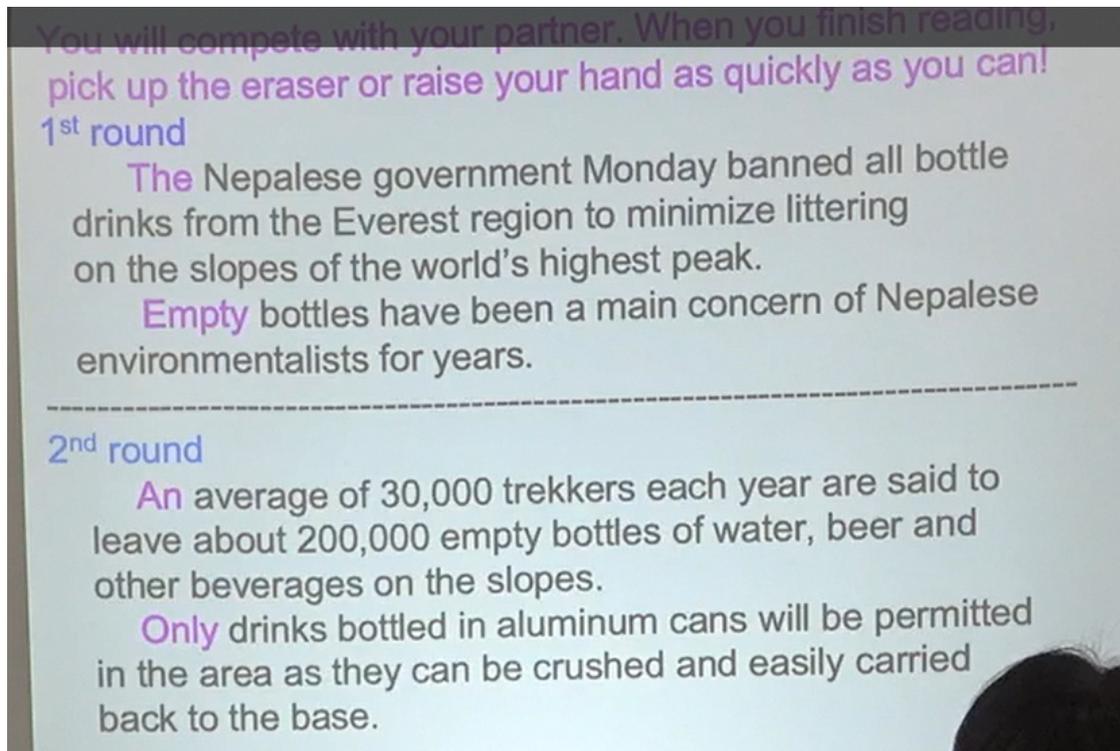
塾長「はい、では。ペアの間に消しゴムを置いてください。1st round を読み終わったらその消しゴムを取ってください。相手に聞こえるように読んでくださいね。」

スクリーンにはこれまで読んだ英文を、前半と後半で2つに分けた画像が映し出された。

塾長「それでは、よ〜い、ドン！」

パートナーに負けまいと、すさまじい音量で音読をする塾生たち。
早く読み終わった方は、消しゴムを奪ってドヤ顔である。

塾長「次はハンデ戦です。1st round で勝った人は、負けた人が一行読み終わったあとにスターしてください。」



塾長「さあ、ちょうど 20 分が経ちました。最初にやった時は、できませんでした。今はできるようになっているはずです。」

8) Final Challenge で Change を実感

スクリーンには、20 分前に我々が読み切れなかったあの英文が再び提示された。

「最初と同じように、英語の文字が流れます。消える前に高速で音読しましょう。」

会場にはスラスラと難なく読み上げていく塾生たちの姿があった。
「おおお〜！！！」読めるようになった塾生から歓声上がる。
スクリーンには中嶋塾長からの祝福のメッセージが浮かび上がった。

おめでとうございます！

塾長 「では、最後にもう一度音源を聞いてみましょう。どんな感覚を皆さんは得られるでしょうか。」

(会場に音源が流れる。)

(…！！まるでスローモーションのようだ。完璧に聞き取れるし、意味もわかる！す、すごい…。)
目を丸くしている塾生たちを見て、塾長が静かにおっしゃった。

塾長 「速く音読できるようになれば、どのような速さや分量のリスニングでもできるようになります。
大事なことは、英文を高速処理する力を生徒につけさせてあげることです。」

そして、最後にこう付け加えられた。

「授業では、『わかった』で終わるのではなく『できた！』という感動を与えることが何よりも大切なことです。それによって、人はもっとできるようになりたいと考えるからです」

塾長のリスニング(音読)指導を受けて

* 本田大輔先生が書かれた原案（風見郁江先生が推敲・校正）に中嶋が加筆修正したものです。

私たち教師の仕事は、自律的学習者を育てることです。それは、たとえ教師（指導者）がいなくても、自分が見聞する様々な情報から学ぼうとする学習者のことです。吉川英治氏が、著『宮本武蔵』の中で「我以外皆我師」という言葉を残しています。これこそが自律的学習者の視座だと言えます。

自律的学習者の反対語は、依存的学習者です。言われたことしかしない、言われるまで待っているという学習者です。教師が自律的学習者か、それとも依存的学習者かで、クラスの生徒もやがては同じ状況になります。自覚していないのは教師だけで、生徒は薄々気づいています。

では、自律的学習者を育てる授業とはどのようなものでしょう。それは、「教師が教え、子どもは学ぶ」という関係になるものです。この場合、教師は肝心なこと（本時の評価規準の内容）は学習者が気づけるようにします。つまり、学習者が「自ら学びとる」場面を演出できるように、教材研究をします。

一方、依存的学習者を育てる授業とは、教師がくどくどと説明し、子どもはテストのために忖度をし、欠伸をこらえながら聞いているような授業です。プリントやスライドを作って、それを予定調和で進めていく授業です。

脳科学では、“Use it or lose it.”という言葉があります。私たちの脳は、使っているシナプスを強化し、使わないシナプスは物理的に切り捨てていると言われていています。つまり、どんなに大事なことでも、反芻しない、習慣にしない限り、脳はどんどん忘れていく（できなくなっていく）ということです。

自律的学習者は、自分で判断します。自分でプロセスを描くことができます。自分で気づけます。つまり、彼らは知識を「知恵」に昇華させることができるのです。教師によって張られた伏線（問題解決ができるために、つけなければならない力）を、自ら「回収」していきます。そして、自分の力で気づくこと、できることを至上の喜びとしています。それが、内発的動機付け（Intrinsic Motivation）につながり、学習効果を高めることを知っているからです。

自分の力で獲得したものでなければ、使えるようにはなりません。だから「わかった」というレベルで終わってはいけないということです。なぜなら、それで人は満足してしまい、脳が「終わったこと」として処理し始めるからです。指導技術に関心がある教師、セミナーに参加したり、書籍に書かれている新しい情報にすぐに飛びつく教師は、「わかりやすい授業」を目指そうとします。それ自体は間違っていないのですが、「どの子どもワクワクする課題」や「わかりやすい場面」を提供するよりも、「教師の指導方法」や「すぐにできる課題」を用意してしまうことが多くなっているのが現状です。自律的学習者は、後者のような授業では心がときめきません。つまり、後者のような授業が多くなれば、自然に依存的学習者が増えていくということです。

「わかる授業」ではなく「できるようになる授業」がなぜ大切なのか、その理由が3つあります。

1つ目は、「できるようになる授業」は、**学習者を新たなステージへと誘う**からです。

できるようになった学習者たちは、上述したような自律的学習者となります。「もっと知りたい」「もっとできるようになりたい」という欲が生まれてくるからです。私たちが上手になったことがあるとしたら、それは「わかった」からではなく、「できるようになった」からであり、その後も継続したからこそ自分が誇れるレベルにまで到達できたのだということです。「やった、できた！」という声が、教室のあちこちで生まれる授業を想像してみてください。それこそが、「ワクワク感を醸成する授業」です。

「わかりやすい授業」を「できるようになる授業」にするということは、「教科書を教える授業」から「教科書を使って、どの子どもできるようにする授業」に転換するということです。

船の方向を「取り舵」（左へ）や「面舵」（右へ）のように小手先で変えるのではなく、船の向きを真逆にするという事です。それは、学習者が授業の「ど真ん中」にくる授業です。そのような学級では、自分たちで学ぼうとする態度、仲間との協働学習を楽しみにする姿勢が見られるようになります。私たちが目指そうとしているのは、目の前の学習者たちをそのようなステージへと誘うことです。

2つ目として、「できるようになる授業」は、**教師を新たなステージへと導いてくれる**からです。

自律的学習者を育てるには「ティーチング→コーチング→メンタリング」の流れが必要になります。最初のティーチングで「まあ、能力に差があるから、この生徒はこれくらいでいいか」と指導者が判断したらどうなるでしょうか。その生徒は、それをゴールとしてしまい、それ以上を目指さなくなります。

音読が学習者自身の力で正しくできるようになるためには、一連の塾長の指導でお伝えしてきたように、時期と発達段階に応じて、3年間で適切に、かつ系統的に指導をしなければなりません。私たちが、令和型の単元計画と学習指導案づくりで取り組んだように、「全体構想」（何の力をつけるために、どのようなプロセス、どの場で評価をするか）が不可欠です。つまり、できるようにするには、実際に「できる」とは「何がどこまで」という要素をマンドラートで書き出し、それを3年間の中で体系化させることが必要になります。

「誰が、なんのために、いつ、何を、どのように」がきちんと教師の指導観の中に組み入れられた授業では、学習者の取り組みが変わります。教師は、生徒用のCAN-DOを用意し、その中には「定期テストの設問との繋がり」についても書き込み、それを学期の最初に渡しておきます。すると、生徒たちは、それに基づき、単元の間評価、最終の総括（振り返り）を自由記述で「できるようになったこと、まだモヤモヤしていること」を書くようになります。生徒たちのモヤモヤ感を知ること、教師の次の指導が浮かび上がってきます。つまり、新しいステージが意味付けられるということです。

生徒のモヤモヤ感を払拭するには、教師自身の卓越した専門性（「なるほど！」という納得を引き出す指導力、適切に評価をする能力）が必要になります。いずれも大きな「責任」を伴います。しかし、真摯にそれに向き合うことで、「なんとなく教科書を教えていた教員」だった自分は、クラスの多くの生徒から「信頼される教師」（新しいステージ）となるのです。

3つ目、「できるようになる授業」は、**教育を新たなステージへと繋げてくれる**からです。塾長の音読指導を受け、学習者が「学習の仕方」を身につけたとしましょう。しかし、それを継続させる仕組みがなければ、正しい指導が習慣化されることはありません。習慣化されない行動は、実を結ぶこともありません。

つまり、最終ステージは、学習者の家庭学習を可能にする**仕組み作り**です。塾長が講座で示した「**單元ごと**」の音読テストや音声を「**完コピ**」する指導は、3年間の見通しをもち、俯瞰的に準備をしておく必要があります。つまり、家庭学習で「**宿題**」をやるという発想から、**反転学習**（家庭で調べてきたこと、考えたこと、時間をかけて制作したものを活かし、授業で仲間と練り上げるような学習）にすることで、学習に必要感が生まれてきます。

「**宿題**」は、多くの場合、プリントをやる、単語を調べるという作業学習が多く、生徒にとってはノルマ（しなければならない）という発想しか生まれません。つまり、ワクワクするような内容ではないということです。しかし、たとえばプレゼンテーションのスライドの案を考えてくる、それを次の時間にグループで発表する、英語で質疑応答するという「**課題**」ならどうでしょう。準備が必要です。さらに、課題をやってくることに「**責任**」が生まれます。学習効果を高め、学びの質を高めてくれるのは、クラスの中で「**協働できる仲間たち**」です。

同じことが、教師にも言えます。同僚と、教科経営についてとことん話をすることはあまりありません。学年では、生徒指導、学年行事などが共通の話題になるので、一定のコミュニケーションをとることができます。しかし、「**学校**」というところは、教科部会よりも学年部会が重要視される文化を持っています。（筑波大附属中は、教科のための職員室があり、自由に話し合える雰囲気があります。肥沼先生のレポートでは、その驚くべき実態と秘密、蒔田先生の謎解きがわかりました。これを自分の勤務校にどう活かすかが大事です）

オンライン塾、対面塾では、心ある同志がつながり始めています。「こんな力を育てたいです。一緒にやりませんか？」「この教科書を使っている人で繋がりませんか？」「一緒に仕組みを作ってみませんか？」「生徒に渡す CAN-DO の雛形を作りませんか？」という声が飛び交っています。勤務校ではなかなかできないことですが、毎月全体で1回、グループでは随時集まるとことん協議されます。

教師一人がどんなに頑張ってみたとところで、一人がどんなにスーパーteacher になったところで、学年全体の生徒を変えることはできません。一人で作ったルールは、他のクラス（ルールに関心のない教師の授業）でいとも簡単に忘れられます。しかし、学年全体で「**答えの後に、必ず『なぜ』を聞く**」というルールを作り、どの授業でもそれを実践したらどうなるでしょうか。学校は組織（チーム）で動きます。チーム力を高めるためには、「**授業でプラスの生徒指導（できた！が実感できる）**」をすることが大事になるように思います。

仲間（同志）がいれば、そのような「**勤務校でこうやってみよう**」が生まれてきます。「こんな生徒を育てたい」という熱い思いを語り合える同志がいれば、それぞれの夢が大きく膨らんでいきます。

新型のウイルスがなかなか終息しません。新たなウイルスの登場も懸念されています。また、AI が音声だけでなく、本物と見間違えようなクローンも作成できる時代となりました。国際情勢が緊迫を増しています。本来、ボーダーレスであるはずの1つの地球で、それぞれの利権への思惑が絡み、多くの戦乱、内紛が勃発しています。さらに、頻繁に起こる天災も多くの人々の心を痛めています。

VUCA の混沌とした時代に生き抜く「**逞しい人間**」や「**ちょっとやそとの挫折ではへこたれない人間**」を育てるには、「**できた！**」で主体性を育て、執着心を高める教育が求められています。